

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第28回
 第6章 鳥越信先生
 その1 三つの児童文学史展（下）

1979（昭和54）年11月、鳥越信先生（1929～2013年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1年浪人して入学した大学院の1年次で、24歳だった。

展示ケースの型紙

毎年、11月中ごろから年末にかけて、大阪府立中央図書館1階エントランスのスペースで児童文学展が開催される。何かテーマを決めて、国際児童文学館の貴重な資料を一般の方たちにも見ていただく企画展示だ。大阪国際児童文学振興財団が協力してつくっていく。

一昨年（2024年）のテーマは「幼年文学のはじまりと現在」で、私が編集を担当した。昨年は「日本児童文学 戦後80年のあゆみ」、これも、私が編集担当だった。といっても、もちろん、国際児童文学館のスタッフのみなさんや、財団の総括専門員の土居安子さんがいっしょに考えてくださる。

昨年は、8月の下旬になって、展示リストの案を国際児童文学館に送った。最初に展示概要を書いている。

長い戦争が敗戦で終わったあと、日本の児童文学は、子どもたちに何をどのように語ろうとしたのでしょうか。戦後80年のあゆみを作品でたどります。

展示会全体を七つの章に分けて、のべ75点の資料の展示を提案した。前回書いた上野の国際子ども図書館で2011（平成23）年から4年半以上にわたって開催された展示会「日本の子どもの文学 国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」の図録なども見直しながら考えていった。もう少し多くの資料が展示できるかなとも思ったけれど、それは、児童文学館での打ち合わせのときに、よく相談することにした。

9月4日、午前10時から昼休みをはさんで午後2時ごろまで、その打ち合わせをした。展示リストの案にあげた資料を書庫から出しておいてもらって、展示会のシミュレーションをする。展示会は、いくつもの形のちがう展示ケースで構成される。それぞれの展示ケースの型紙があるから、その上に実際に資料を置いてみるのだ。このケースは、これでよしとなると、土居さんが型紙の上の資料の写真を撮る。ならば資料は、鳥越信先生が寄贈したものも多かったから、私にとっては、かつて沖縄の「児童文学のあゆみ展」で展示した本や雑誌との45、6年ぶりの再会でもあった。

打ち合わせをへて、展示会は、私の案より一つふえて八つの章で構成することになった。展示資料もだいぶ多くなって、のべ110。各章のタイトルは、つぎのとおりだ。

- 1、まず、雑誌からはじまった。
- 2、批評が拓くもの

- 3、「現代児童文学」の出発
- 4、児童文学と「戦争」
- 5、「童話」を引きつぐもの
- 6、ファンタジーのぼうけん
- 7、「現代児童文学」の変容とYAの隆盛
- 8、海外の翻訳作品

この章立てにしたがって、私は、各章の解説パネルの原稿を書いていった。その原稿は、展示会場で配布される『展示目録・解説』にそのまま掲載された。企画展示「日本児童文学 戦後80年のあゆみ」は、11月14日の金曜日にはじまり、12月28日の日曜日までつづいた。

「進歩」と「近代」

前回のおしまいに引いたけれども、国際子ども図書館の「日本の子どもの文学」展の開催当時の私の文章には、こう書いていた。——「小川未明に代表されるような童話がすたれて、新しい児童文学になったという歴史観——今回の展示も基本的にはその歴史観で作っている——をこれから先もそのまま維持していった方がいいのかどうか。」（宮川健郎「日本の子どもの文学——国際子ども図書館所蔵資料に見る歩み」展を企画して『国際子ども図書館の窓』第12号、2012年9月）。このことは、昨年のお阪では、どうだったのか。この歴史観は、つまりは「鳥越史観」なのだが、大すじ維持された。ただ、展示会の関連イベントでは、この歴史観をいくらかでも相対化しようと試みた。

関連イベントというのは、展示会開催中の12月14日（日曜）に行った講演と対談である。ゲストに児童文学評論家・作家で日本児童文学者協会理事長の藤田のぼるさんをおまねきした。（注1）まず、私が「現代児童文学史の語りかた」と題して、つづいて、藤田さんが「現代児童文学史」への道程」という題でやや短い講演をした。そのあと、ふたりの対談、そして、60名ほど集まってくださった聞き手の方たちとのやりとりの時間になった。

当日の私の講演のレジュメを見るとわかるが、いま書いている、この連載と同様、三つの児童文学史展のことを軸に話を構成している。2025年・大阪の展示会については、「鳥越（・古田）史観」を超えて」（カッコ内原文）という見出しで、「童話を克服して「現代児童文学」が成立したという「進歩史観」（一種の「成長物語」）」（カッコ内原文）と記している。

「鳥越史観」あるいは「鳥越（・古田）史観」については、少し前から「進歩史観」ということばで考えようとしてきた。「進歩史観」については、展示会が終わって、年がかわっても、もう少し勉強しようと考えているのだが、たまたまのように出会った論文、哲学者の干場薫さんの「進歩史観とベンヤミン——進歩の概念についての一考察——」（『一橋論叢』1991年8月）がわかりやすく、参考になる。

論文の「まえがき」には、「進歩史観とは、歴史についての思想であり、歴史を何らかの基準に従って、例えば、人間精神の発達や理性の発展、あるいは、生産力の増大という観点から、進歩するものとして捉える思想である。」「一つの歴史観であり、それも西欧近代が発明した、近代という時代に固有の思想的現象の一つではなかつたらうか。」とある。若き日の鳥越信が起草したという早大童話会のマニ

フェスト「少年文学」の旗の下に！」(『少年文学』1953年9月)のなかの「進歩」ということば(「科学は常識によってさえぎられ、変革は権力によってはばまれる。発展と進歩の芽生えるところ、古きものは常に全力をあげてその歯車の前進をさまたげた。だが同時に、勝利は常に新しきものの側にかがやく。……)や、「近代」ということば(「従来の「童話精神」によって立つ「児童文学」ではなくて、近代的「小説精神」を中核とする「少年文学」の道を選」ぶ)を思い出す。

論文の第1節「進歩史観の論理」には、「進歩史観を唱える思想家たちは、何らかの進歩の基準に従って歴史を区分するのが通例である。また、そこに進歩の歴史的法則性を見るのが普通である。」ともある。私は、大阪の展示会の解説でつぎのように書いた。

1959年の二つの作品(佐藤さとる『だれも知らない小さな国』、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』一宮川後注)は、いずれも小人の登場する長編のファンタジーで、どちらも戦争体験が下じきになっています。これらによって、「童話」とはちがう「現代児童文学」が成立したと考えられます。(3、「現代児童文学」の出発)

1959年に「現代児童文学」が成立したという、この考えかたは、古田先生の時代区分(「昭和→戦後」『国文学 解釈と鑑賞』臨時増刊、1962年11月など)や鳥越先生のそれ(「日本児童文学の戦後二十年」『週刊読書人』1965年5月3日など)のとおりで、ここは、まったく「鳥越(・古田)史観」なのだ。(注2)。

「成長物語」と「理想主義」

干場薫論文は、ヴァルター・ベンヤミンが「進歩のイデオロギーの克服を問題にする」ことへと入り込んでいくのだが、私のほうは、先のレジュメで「進歩史観」を「一種の「成長物語」としている。「成長物語」は児童文学の用語で、その意味は、石井直人の短い文章「児童文学における〈成長物語〉と〈遍歴物語〉の二つのタイプについて」(『日本児童文学学会々報』1985年3月)までさかのぼって確認しなければならない。

〈成長物語〉では、主人公は一つ的人格という立体的な奥行きをもった個人である。主人公が経験したことは、その内面に累積していった、自己形成^{ビルドアップ}が行われる。(中略)

〈遍歴物語〉は、対比的に、主人公はむしろある抽象的な^{イデオ}観念であって、それが肉化したものとしての人物にすぎない。いわば、主人公そのものはどうだっていいというところがあり、重要なのは作品を通じて繰り返し試される観念の方である。(ルビ原文)

石井が「成長物語」の例としてあげる作品は、J・R・タウンゼント『アーノルドのはげしい夏』(1969年/神宮輝夫訳、岩波書店1972年)、山中恒『ぼくがぼくであること』(実業之日本社1969年)であり、「遍歴物語」は、ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』(1865年)、寺村輝夫『ぼくは王さま』(理論社1961年)である。

そして、石井直人は、「『少年文学』の旗の下に！」は「その文章自体、〈成長〉をめぐるとリックから構成されている。」とし、「このことは、戦後児童文学の理念および童心主義批判が、成長物語のタイプをめざして、前近代である遍歴物語の語りを抑圧していく過程であったことを示している。」と述べる。繰り返しの引用になるが、「『少年文学』の旗の下に！」は、メルヘンや生活童話などを克服して、「近代的『小説精神』を中核とする『少年文学』の道を選」ぶとしたからである。

石井のいうように、1960年前後に出発した現代児童文学は、「成長物語」として書かれることがほとんどだった。そして、私は、石井の意見を踏まえながら、「現代の児童文学を強い力でしばってきたのは、『成長物語』の考え方だが、一九八〇年代以降は、その『成長物語』の枠組が、さまざまな場面でゆきぶられている」とした（宮川健郎『現代児童文学の語るもの』NHK ブックス 1996年）。昨年のおおの展覧会の解説では、この変化を「成長物語」という用語ではなく、児童文学の「理想主義」ということばによって語ろうとした。

1960（昭和 35）年刊行の山中恒『赤毛のポチ』は社会主義的なリアリズム、松谷みよ子『龍の子太郎』は民話の再創造、今江祥智『山のむこうは青い海だった』はタイトルによくあらわれているようなリリカルな文体の少年小説で、それぞれ趣きの異なる作品ですが、共通項を引き出すこともできます。子どもをめぐると問題を描きながら、その問題は子どものもつエネルギーで必ずのりこえられるという考えでつくられていることです。これは、児童文学の「理想主義」「向日性」と呼ばれる思想です。（3、「現代児童文学」の出発）

1980（昭和 55）年、那須正幹の長編『ぼくらは海へ』は、小学6年生たちの夏の物語です。彼らは、受験や家庭崩壊などに直面している自分たちの心を投げ込むように、船づくりに熱中します。やがて、ふたりが、その小さいかたで海へ出て、ひと月たっても帰りません。那須は、困難な現実をのがれて船出する少年たちを描いて、子どもをめぐると問題が子どものエネルギーで必ずのりこえられるかどうかはわからないということを書いたのです。児童文学の「理想主義」をいったん保留することにもなりましたが、これは、子ども読者を少し自由にしたかもしれません。『ぼくらは海へ』は、現代児童文学の変質のしるしともいえます。（7、「現代児童文学」の変容とYAの隆盛）

「成長物語」は、いつも「理想主義」をはらんでいる。1960年の『赤毛のポチ』や『龍の子太郎』『山のむこうは青い海だった』は、主人公たちの「成長物語」だった。ところが、1980年の『ぼくらは海へ』の少年たちの自己形成は死につながるもので、大人がのぞむような「よい成長」にはいたらない。「理想主義」も保留されてしまう。石井直人が「〈成長〉をめぐるとリックから構成されている」とした「『少年文学』の旗の下に！」を著した鳥越先生の「鳥越史観」を「進歩史観」、あるいは、一種の「成長物語」だとしたが、「現代児童文学」は、1980年代には「成長物語」を変容させてしまったのである。（つづく）

（注）

1、藤田のぼるさんは、個人雑誌『ドボルザークの髭』（2015年11月創刊）で「物

語的現代児童文学史」を連載中。最新号の第 13 号（2026 年 1 月）には、「第三章 七〇年代児童文学の諸相 三、原点としての子ども ②灰谷健次郎」が掲載されている。

- 2、1959（昭和 34）年を区切りとする意見は、古田足日、鳥越信より前に神宮輝夫が述べている（神宮輝夫「戦後児童文学の変遷」『学校図書館』1962 年 5 月）。なお、この問題については、宮崎芳彦『戦後児童文学史の未解決点』（てらいんく 2010 年）の「肆 古田足日・五九年戦後画期説の成立」も参照のこと。